

神田外語大学紀要第 29 号
抜刷 2017 年

The Journal of Kanda University of International Studies Vol. 29 (2017)

「翻訳を通して中国理解を広げよう」プロジェクト
Broadening the understanding of China through
a Translation Project

植 村 麻紀子

「翻訳を通して中国理解を広げよう」プロジェクト

Broadening the understanding of China through a Translation Project

植村 麻紀子

1. はじめに

2016年3月12日付で発表された内閣府の「外交に関する世論調査」の結果によると、中国に対して「親しみを感じる」と回答した人は14.8%で、前回2014年調査と横ばいであったが、「親しみを感じない」は83.2%と過去最高であった。また、現在の日中関係について「良好だと思わない」は85.7%にも上っている一方、「今後の日本と中国との関係の発展は、両国や、アジア及び太平洋地域にとって重要だと思いますか」という問いに対して73.3%が「重要だと思う」と回答している。(20代では82%が重要だと回答。)

こうした状況を背景に、本学アジア言語学科中国語専攻3・4年次選択必修の地域言語科目である「中国語翻訳法Ⅱ」では、2015年度後期より「翻訳を通して中国理解を広げよう」というプロジェクト学習に取り組み始めた。従来、大学における翻訳の授業では、教員が選んだ小説や新聞記事などを学習者が各自翻訳し、訳文を授業で発表し、正確に読めているか、自然な日本語訳になっているか、語彙や文法などで注意すべき点はどこか、などを教員が解説するというスタイルが一般的である。しかし、学習言語に関する知識は増え、翻訳能力は向上しても、小説の内容や記事の情報自体への深い思索がなく、「訳して終わり」の受動的な学びで終わってしまうことが多い。そこで、本プロジェクトでは、「どんな素材を何のために訳すのか」、「誰に読んでもらうために翻訳するのか」を考えることか

ら始め、教室内の学びを教室外へとつなげ、学習者が「情報の発信者」となる主体的な学びの形を模索した。そのテーマとして「翻訳を通して中国理解を広げよう」と掲げ、中国語の文章を日本語に翻訳し、中国や中国人のさまざまな側面を身近な日本人に伝えることで、以前より中国に親しみを感じてもらうことを目標とし、その達成度を調査した。本稿はその実践報告である。

2. プロジェクトの概要

2. 1 実施クラス・実施時期

「中国語翻訳法Ⅱ」2015年度後期全15回授業の後半(11月～1月)8回を使い、履修者22人(聴講を含む)を5つのグループに分けておこなった。ただし、1回90分の授業すべてをこのプロジェクト学習に当てるのではなく、前半60分は中国映画を見て字幕をつける練習(セリフを自宅で翻訳してきた上で、実際の映像を見て修正し発表)をするという個人学習と並行しておこなった。その理由は3つある。1)前期より取り組んでいる各種レアリアの翻訳を引き続き行い、さまざまな文体の中国語に触れ、固有の様式・語彙についての理解を深め、それぞれにあった翻訳方法を学ぶ。2)授業時間を使ったグループでの話し合いと、授業外で各自が作業する時間を取ることでプロジェクトの効率を高める(学習者によって空き時間が違うので、話し合いをすべて授業外にするのは難しい)。3)授業が日本語による話し合いに終始すると、中国語を学んだ実感が乏しいという一部の学習者の声を反映。

2. 2 題材(テーマ)選びと目的・目標

鈴木2012(35-36頁)では、プロジェクト学習は自分が何とかしたいと「願っていること」をテーマとし、以下の3つの視点で題材を選ぶことを提案している。

現実：学習者にとって、“自分ごと”で身近に感じるものであること。

価値：取り組む“必然性”を感じられるものであること。

貢献：その取り組みが“自分（たち）以外”の人にも役立つものであること。

また、「プロジェクト学習は、学習者自身が『ビジョン（目的）』と『ゴール（目標）』を明確にしてスタートし、ビジョンとゴールを常に意識することにより、俯瞰する姿勢を持ち続けることができます」（同 14 頁）とあるように、プロジェクト学習の成否は学習者が「やらされている」のではなく、自ら「やりたい」と思えるかどうか、目的と目標を共有できるかにかかっているとと言っても過言ではない。しかし、興味・関心や好みは人によって異なるので、全員が納得出来るテーマを見つけるのは容易なことではなく、完全に自由にするとテーマ決めだけで時間をかなりとってしまう。そこで、履修者全員が共有出来そうな大きなテーマをまずクラス全体に投げかけ、共感を得たら、グループごとに翻訳する素材を自由に選び、プレゼンテーション、そのプレゼンを聞いて他のグループに移りたくなった場合は移ってもよい、という方法で決めることにした（グループ分けの詳細は後述）。初回授業では、学習者が中国語を学ぶ中で周囲の人に言われてきたことや、これまで目にしてきたマスコミ報道を思い起こさせ、「翻訳を通して中国理解を広げよう」という全体テーマを掲げた理由を話した。その際、筆者自身の体験を話し、共感性をより高めることも意識した。

全体テーマを共有した上で、このプロジェクト学習のもう一つの目標として、メディア・リテラシー（情報メディアを主体的に読み解いて必要な情報を引き出し、その真偽を見抜き、活用する能力）やクリティカル・シンキング、コラボレーション力などのいわゆる「21 世紀型スキル」の養成も含んでいることに触れた。

本プロジェクトの意義と、具体的に何をすべきかの道筋を初めにきちんと提示し、共有しておくことが肝要であると考え、授業時に口頭説明しただけでなく、kuis moodle 上に目標・目的シートや今後の展開などをアップし、学習者が随時参照できるようにした。

2. 3 プロジェクトの進行表（授業計画）

以下は、kuis moodle の「中国語翻訳法Ⅱ(b)2015 後期」のコース上に掲げたプロジェクトの流れと課題の指示である。評価方法についてもあらかじめ示した。

【プロジェクト目標（P 目標）】

中国語で書かれた文章や記事を日本語に翻訳し、中国のことをよく知らない人・関心のない人・偏った情報だけを信じている人に読んでもらい、日本における中国理解を深める。

グループで取り組むプロジェクトですが、次回までに各自で準備しておくこと。11 日にグループ編成する際の参考にします。

第 1 回：日本における中国理解の現状把握と翻訳の素材選び 11 月 11 日

- ・周囲の日本人に、中国に関するイメージや知っていることをたずねたり（アンケート調査してもよい）、日本の新聞や雑誌、テレビ等でどのような報道がされているか調べたりして、日本における中国理解の現状についてまとめる（後日クラスで発表。その際の資料は各班 A4 レジューメ 1～2 枚程度にまとめること。パワーポイントなどでプレゼンしてもよい。）
- ・それらの調査結果をふまえて翻訳素材を探してくる。上記【P 目標】を達成するためにどんな素材を翻訳したらよいかよく考えること。これまで日本ではあまり知られていないこと、日本人に（特に身近な人に）中国理解を広げるために、ぜひ知ってもらいたいことは何なのか、また翻訳したいジャンルなど自分たちの好みも考慮して素材を集める。

第 2 回：翻訳の素材決定と各自の翻訳作業 11 月 18 日（～25 日）

- ・集めた素材の中からグループで翻訳するものを選定する。＊記事の出所に注意し、出典を明らかにする（原文のコピーを必ずとっておく）。
- ・翻訳作品を①どのような形で、②誰に紹介するかも考えながら決める[例：近所の小学校へ贈呈、大学内の掲示板や MULC で展示、冊子を作り履修者の家族や友人に配布等]

- ・グループで選んだ文章や記事を、次回の授業 11 月 25 日までに分担して各自翻訳。

第3～5回：グループで翻訳を整え、まとめる作業 11月25日、12月2、9日

- ・各自の訳文を持ち寄りグループで整える。翻訳を通して伝えたいことは何なのか、グループでよく話し合い、文体や体裁、全訳か抄訳か、どんな見出しをつけるか等を考える。

第6回：クラス内で発表 12月16日

- ・各グループが作成した訳文と、その発表形態・発表場所の案をクラスで発表し、他のグループに助言を求める。訳文を教師に提出し、翻訳チェックを受ける。

翻訳作品制作仕上げ 冬休み

- ・クラス内発表会で得たコメントを反映し、翻訳の精度を高め作品に仕上げる。また、自分たちが発表したい場所に掲示・配布・プレゼンすることが可能かどうか交渉する。

第7回：翻訳作品の完成披露発表会 1月6日（～13日）

- ・翻訳作品のポスター発表。発表会后、次週の授業までに、家族や友人・知人に読んでもらい、感想を求める。

第8回：クラスでのふりかえり（感想を集め目標達成度を確認） 1月13日

- ・統一フォームのアンケートで集めた翻訳作品についての感想をクラスで発表し、【P 目標】を達成できたかどうかグループでディスカッションする。
- ・活動を通して感じたこと、学んだことをクラスでディスカッションする。

総括的評価

- ・【P 目標】を理解して素材選びをし、発表する場所や読者に合わせた適切な翻訳作品ができたかどうかをルーブリックで評価する。（教師の評価／学習者相互評価）
- ・翻訳作品についての感想（アンケートやインタビュー）から【P 目標】の達成度をグループで評価する。あわせて各自の取り組み姿勢や協力度なども自己評価する。

第6回と第7回、冬休みをまたいで2回の発表会のみ、1コマ90分全てを使った。作品を完全に仕上げる前に、年末に一度発表会をおこなったのは、「なぜ」「何を」翻訳し、「誰に」読んでもらいたいのか、を改めて意識し、翻訳の精度を高めること、他のグループからのフィードバックを作品に反映させることを意図したものである。

2. 4 評価

2. 4. 1 総括的評価の構成

翻訳作業に入る前に評価方法を提示し、作品制作やプレゼンテーションの際の参考にするよう示した。教員による評価（①翻訳作品＋②作品発表会のプレゼンテーション）、学習者による相互評価、自己評価の三本立てで、すべて学期末の成績評価にも反映させた。紙幅の都合上、①のみ示す（次頁・表1）。

2. 4. 2 教員による作品評価ルーブリック

評価基準は「翻訳素材の選定、翻訳の正確さ、作品の構成と正書法、グループでの協力度」の4項目とした。うち「正確さ」を2倍に加重化している。ルーブリックには以下の指示文を付した。

指示文：出来上がった作品と一連の活動を以下のルーブリックで評価しますので、評価基準の「目標を達成」の欄を読み、それに留意しながら作成を進めてください。

表1：翻訳作品評価ルーブリック（教員用）

評価基準	目標以上を達成 (5点)	目標を達成 (4点)	目標達成まで あと少し！(3点)	目標達成まで 努力が必要(2点)
翻訳素材の選定	自分たちや読者の好み・ニーズも考慮しながら、目的・目標に沿って適切な素材を選定している。	プロジェクトの目的・目標に沿って、適切な素材を選定している。	目的・目標を意識しているものの、自分たちの好みや素材の入手しやすさを中心に選んでいる。	目的・目標を意識せず、自分たちの好みや素材の入手しやすさだけで安易に選んでいる。
翻訳の正確さ ×2	原文の中国語を正確に読み取った上で、自然な日本語で読者や発表の場にあった翻訳作品に仕上げている。	原文の中国語を正確に読み取った上で、わかりやすい日本語に翻訳できている。	原文の中国語をほぼ逐語訳しており、日本語として不自然などがある。	原文の中国語を正確に読み取れていないところがあり、かつ日本語として不自然なところも多い。
翻訳作品の構成・正書法	イラストや見出しを効果的に用い、伝えたい内容を的確にまとめている。誤字・脱字もない。	伝えたい内容をわかりやすくまとめている。誤字・脱字もほとんどない。	原文をほぼ逐語訳しただけで、読者を意識した翻訳作品としての工夫に欠ける。誤字・脱字も若干みられる。	原文をそのまま逐語訳しただけで、読者を意識した翻訳作品として仕上げていない。誤字・脱字も目立つ。
グループでの協力度	グループの成員一人ひとりが自分の責任を全うしつつ、十分に意見交換したり助け合って制作している。	グループの成員一人ひとりが自分の責任を全うし、意見交換しながら協力して制作している。	一人ひとりが自分の責任を果たすことに精いっぱい、力を合わせて1つのものを作り上げる意識がやや薄い。	積極的にコミュニケーションをとらず、協力して1つのものを作り上げる意識に欠ける。

3. 実際の進行

3. 1 ジグソー活動によるグループ分け

新井・坂倉 2013 によれば、協働学習において重要なのは、そのグループの目的と分け方の方法について納得感が持てるかどうか、である。気の合う人と／座席の近い人を機械的に／学年や男女を均等に／成績を考慮して…などグループ分けの方法は様々あるが、今回はグループを固定してから翻訳素材を決めるのではなく、「何のために」「何を」翻訳するのか、よく話し合ってから各自の興味・関心でグループを再編成することとし、ジグソー学習の手法を応用し、以下のような手順でグループ分けをおこなった。

- 1) レッド・イエロー・ブルー・ピンク・グリーンの5色のクリップを4つずつ用意し、好きな色をそれぞれ選ぶ。
- 2) 1 で分けた色別の班で、日本における中国理解の現状を調査し、それをふまえて翻訳素材を選ぶ。(配布したワークシートに記入しながら整理)
- 3) 各班一人ひとりに1~4の数字を当てる。同じ数字の人同士が集まり、選んだ翻訳素材とその理由を発表し合う。
- 4) 最初の色別の班に戻って、それぞれが他の班のメンバーから受けたアドバイスや質問・意見をフィードバックし、素材を最終決定。
- 5) なぜそれを翻訳したいのか、自分たちの選んだ素材の特徴や選択理由を1分程度で代表1名がポスター発表。(発表を聞いて、他の班の素材に興味を持った場合は、班を変えてもよいことを初めに話しておく。)
- 6) 各班から提示された5つの素材から、自分の翻訳したい素材を選び直し、移動し、最終的なグループを決定。結果的に、レッド3人、イエロー4人、ブルー5人、ピンク6人、グリーン3人となった。(以下、Rグループ、Yグループ、Bグループ、Pグループ、Gグループと呼ぶ)¹

¹ 聴講生1名がこの頃から授業に来なくなったのでクラス合計21人で編成。

筆者は、毎回の授業のふりかえりに「大福帳」というコミュニケーションカード²を使い、学んだことのまとめや質問、感想などを書かせているが、グループ分けをした日のある学習者のコメントには、「他のグループの意見を聞いて、誰に何を（翻訳するか）の部分がグループで明確にできた」（カッコ内は筆者が補足加筆）とあった。翻訳素材を決めて作業に取り掛かる前に、「なぜそれを扱いたいのか、翻訳を誰に読んでもらいたいのか」を他のグループに語ることで、自分たちがこのプロジェクトに取り組む意義を明確にし、読者を意識した翻訳を心がけることができたようである。プロジェクト終了後のアンケートで、グループ分けの方法がこれでよかったか尋ねたところ、「話し合いを通して意義や自分の興味を確認できてよかった」と5段階評価でクラス平均 4.2 ポイントと、高い数値を示した。

3. 2 日本における中国理解の現状把握

先に述べたように、学習者はまず、現在の日本における中国理解の現状を把握することから始めた。「はじめに」で触れた内閣府の「外交に関する世論調査」以外に、学生が参照したのは以下のようなサイトであった。

- ・「日本人の嫌中国意識と、中国人の嫌日本意識に大きな位相のずれ—中国メディア」(RecordChina 2014 年 10 月 20 日配信) →新華社（電子版）2014 年 10 月 17 日の記事をもとに書かれたもの。(http://www.recordchina.co.jp/a96008.html)
 - ・NHK 時論公論「日中の国民感情は？～調査から見えてきた課題」（2015 年 10 月 23 日加藤青延解説委員）(http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/230093.html)
- 言論NPO・中国国際出版集団「第11回日中共同世論調査」（2015年10月22日発表）の調査結果をふまえた解説 (http://www.genron-npo.net/world/archives/6011.html)

² 織田揮準先生(三重大学名誉教授)が 1988 年頃に考案・作成した授業用カード。名称を変えて他大学でも使われており、早稲田大学人間科学学術院教授・向後千春研究室の公式サイトからテンプレートをダウンロードできる。筆者は 2015 年 4 月から使用し始め、2016 年後期以降は、これをアレンジした“Reflection&Communication card”を独自に作成し使用している。

この共同世論調査によると、日本人の中国に対する印象は「良くない」「どちらかといえば良くない」あわせて 88.8%だが、最も悪かった 2014 年の 93.0%よりはやや改善している。一方、中国人の日本に対する印象は、「良くない印象」が前年の 86.8%から 78.3%に減少、最も悪かった 2013 年(92.8%)から見ると 14 ポイントも改善している。さらに、「良い印象」(「どちらかといえば良い印象」を含む)を持っている中国人は、前年の 11.3%から 21.4%と約 10 ポイント増加している。

特に注目に値するのは、平成 18 年 2 月に行われ、外務省ホームページで公開されている「日中関係に関する意識調査」の結果である(次頁・表 2。G グループが発表で使用)。

(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/yoron05/>)

これによると、イメージや情報の取得源は 9 割以上がマスコミによるものである一方、「自分の周囲の中国人を通じて」「中国を実際に訪れた経験を通じて」の 2 項目を合わせて 8.9%と、身近な人の話や行動、自分が目にした中国の姿が、多少ではあるがイメージに影響していることがわかり、本プロジェクトに取り組む意義を再確認することができた。

表 2：中国に対するイメージや情報の取得媒体

(外務省「日中関係に関する意識調査」平成 18 年 2 月)

	回答率
最近のテレビ・新聞などのニュースやその他の番組を通じて	90.8%
中国の歴史・文化への関心を通じて	12.5%
中国製の製品を通じて	10.8%
インターネット上の情報（掲示板、ブログなど）を通じて	8.6%
自分の周囲の中国人を通じて	4.6%
中国を実際に訪れた経験を通じて	4.3%
特定のものはない	2.7%
その他	0.5%
わからない	2.4%

以上のような調査結果以外に、中国に関して知っていることや中国のイメージを友人、家族、アルバイト先の塾の生徒等に直接尋ねた結果も報告された。主なものを挙げると（学習者の発表通りに記述）、

貧富の差が激しい／グイグイ来る／空気が読めない／観光客のマナーが悪い／爆買い／なんか嫌い／怖い／まともな中国人と「ザ・中国人」に二分化していると、マイナスイメージの言葉ばかりが並んだ。発表した P グループの学習者は、「悪く言うと、中国人を同じ人間だと思っていない、下に見ている感じがする。『なんとなく嫌い』という中学生は、どうしてそのような気持ちを持つようになったのか」と述べ、「自分たちの翻訳を通じて、日本人も中国人も同じ人間なんだよということを伝えたい。日本人が嫌だと思っている中国人が日本に留学に来て何を感じたのかを知れば、中国人の考え方を知ることができ、それが日本人にも共感できるものであれば、（翻訳を）読んだ人は中国人に親近感を覚え、好感にもつながると考える」と述べた。

また、ある学習者は、「自分が大学で中国語を専攻することを友人に話すと、あ

まりいい反応は返ってこず、悲しかった」という体験を語った。

世論調査のような客観的データに加えて、学習者自身が見たり聞いたり感じたことも含めて報告しあったことで、今回このプロジェクトに取り組む意義がより深く共有できたと考える。

3. 3 学習者が選んだ翻訳素材とその理由

以上のような嫌中意識を目の当たりにし、こうした現状を改善したいと、各グループが選んだ素材は以下の通りである。

R グループ：日本を紹介する雑誌・『知日』27 萌（蘇静主編。2015 年。中信出版社）より

「人気キャラクター：ドラえもん／ペコちゃん」, 「進化する顔文字」, 「きゅりーぱみゅぱみゅのシュールな可愛さ」

Y グループ：中国の観光地の紹介

〈紫禁城〉《我爱北京》（2007 年。中国发展出版社），

〈纳西族〉〈云南民族村简介〉雲南民族村のパフレット《游览指南》，

〈七宝鎮〉《江苏 / 上海古镇书》（2004 年。南海出版公司），

〈张掖丹霞国家地质公园〉 <http://baike.baidu.com/view/3213769.htm>

B グループ：中国人の日本旅行記・〈日本游记〉（董媛著。2008 年 2 月 17 日）

（大阪-岐阜-富士山-横浜-東京-北海道・洞爺湖）

<http://www.cqiits.com/contents/16/532.html>

P グループ：日本に留学した中国人大学生 2 人の日記

『留学日记本一记录左左 / 孟孟眼中的日本』（2010 年。中国西安交通大学出版社）

G グループ：中国の絵本・『泥将军』『家树』『小石狮』『屠龙族』『灶王爷』

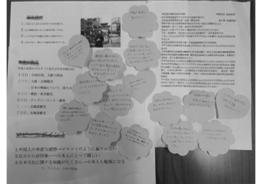
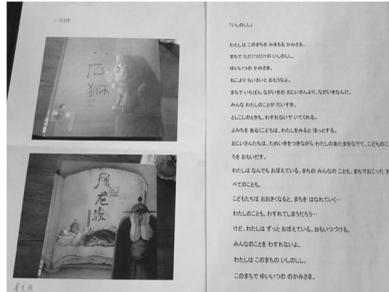
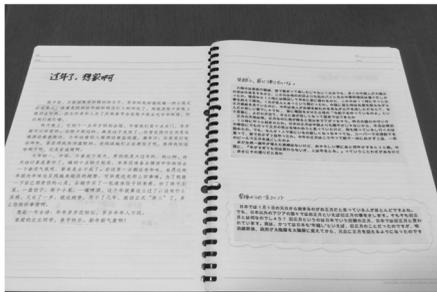
（5 冊すべて熊亮著。2015 年。济南:明天出版社）

翻訳素材の選定に長い時間をかけて議論していた B グループは「日本旅行中の中国人のブログ」、Y グループは「中国の観光地を紹介したガイドブック」を翻訳することに決定したが、これらは筆者の想定外であった。プロジェクトの趣旨を理解していないのではないかと疑問に思い、選定理由を聞いてみると、彼らは、翻訳した文章の内容そのものからの中国理解ではなく、「実際に自分の目で見るのが何よりの『中国理解』につながる。現地に行ってもらうために必要なものは何だろう？」と考えたことがわかった。B グループの翻訳した日本旅行記には、反日感情を持っていた中国人が日本旅行で変わっていく姿が描かれており、「この人のように実際に中国に出かけると見方が変わるかもしれませんよ」とのメッセージが隠されていることが、翻訳作品発表会で語られていた。R グループは、中国で日本のアニメや芸能人が親しまれていることを紹介することで、日本の若者にも親しみを持ってもらいたいと考え、絵本の翻訳をした G グループは、子供から大人まで幅広く読んでもらい、中国の風俗習慣に興味を持ってもらうことを目指した。

大福帳のコメントには、「今回は題材選びにいろいろな資料を見たが、より信憑性のあるものを使うために、情報はいろいろな角度から見ないといけないと思った」とあり、このプロジェクト学習が、中国語の運用能力以外の力を伸ばすことにもつながっていることが見て取れる。平成 20 年 3 月 25 日に出された「学士過程教育の構築に向けて」(中央教育審議会大学分科会 制度・教育部会)によれば、各専攻分野を通じて培う「学士力」とは、専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するだけでなく、知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能として、(1)コミュニケーション・スキル(2)数量的スキル(3)情報リテラシー(4)論理的思考力(5)問題解決力の 5 つを挙げている。(3)情報リテラシーとは「ICT を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる」ことである。

3. 4 学習者の翻訳作品とポスター発表の様子

プロジェクト第7回目の授業で、グループごとに教室に5つの島を作り、実際に作った翻訳作品をポスター発表の形でお披露目した。グループの1人が説明している間に他のメンバーは他のグループの作品を見に行き、付箋紙にコメントを記入したり、質問や感想を述べたりする、という形である。それぞれの作品に込めた思いやその特徴などを、みな生き生きと語っていた。Pグループの作品はリングノートの左頁に原文、右頁に訳文を貼っていて、中国語と日本語の対照をしながら読むことができるだけでなく、さらにその下方に訳者のコメントが載っており、訳者の思いや工夫を知ることによって読者に親しみを持たせる効果があった。絵本を翻訳したGグループは、漢字をできるだけ使わず、読みやすいサイズとフォントを選ぶなど、読者への配慮が見て取れた。以下の写真はPグループ、Gグループの翻訳作品と、Rグループ、Bグループのポスター発表の様子の一部である。



3. 5 学習者の相互評価

次の表3は学習者相互評価の結果である。評価ルーブリックをじっくり見ながらプレゼンを考えたGグループは、学習者相互評価で最高得点を獲得した。プロジェクト開始時に評価基準を学習者と共有し、「評価ルーブリック=学習の指針」とすることが、質の高い発表や翻訳につながることを確認できた。また、プレゼン当日、パワーポイントで作ったファイルを持っている人が欠席したPグループは、急遽、黒板を使って口頭説明した。翻訳の工夫を具体的に話した結果、高評価を得、伝える熱意と的を得た口頭説明は時にICTに勝ることを示した。

表3：学習者相互評価の結果

	発表の わかりやすさ	アピール度	翻訳の わかりやすさ	総合得点
	3点満点	3点満点	3点満点	9点満点
B	2.4	2.3	2.6	7.3
Y	2.5	2.6	1.7	6.8
R	2.0	2.1	1.9	6.0
G	2.8	2.6	2.9	8.3
P	2.6	2.3	2.5	7.4

3. 6 学習者の自己評価の結果とふりかえりコメント

プロジェクト終了時に、以下の6項目について5段階（5が最高得点）で自己評価した結果が次頁の表4である。

①課題発見力/目標設定力/主体性：この翻訳プロジェクトの意義をよく理解し、目標を明確にし、主体的に取り組むことができた。

- ②コミュニケーション力：グループのメンバーと積極的にコミュニケーションをとり、協力して活動することができた。
- ③わかりやすく表現する力：これまで学んだ翻訳の各種テクニックを駆使し、自分の担当部分の翻訳に真剣かつ工夫して取り組んだ。
- ④コラボレーション力：グループの他のメンバーの翻訳をよく読み、グループの作品として統一感を持たせるために様々な提案や調整をした。
- ⑤創造性・リーダーシップ：グループ発表会や作品お披露目会で、どのように表現すべきかアイデアを提供し、積極的に取り組んだ。
- ⑥計画性：このプロジェクトの流れをよく理解し、計画的に進めるよう努めた。

表 4：自己評価の結果（表内は人数）

評価点 評価項目	1	2	3	4	5	平均値
①	0	2	1	13	4	3.45
②	0	1	3	7	9	4.20
③	0	0	2	12	6	4.20
④	0	0	7	8	5	3.90
⑤	0	2	4	6	8	4.00
⑥	1	2	6	6	5	3.60

上の表 4 の値からわかるように、②コミュニケーション力や③表現力は高い値だが、①課題発見力・目標設定力・主体性や⑥計画性ではやや低い値を示した。特に⑥の計画性については、個人差がかなりあることが上の表から見て取れる。自由記述欄のコメントをプラス面・マイナス面に分けて整理し、以下に記す。

1) このプロジェクトに取り組んで良かったこと

協力して進めていく難しさが分かって勉強になった／留学生と一緒にできたこと／翻訳の仕方だけではなく、中国人から見た日本や中国の良いところが知れてよかった／自分たちで選定するのは大変だったけれど、その分興味あるものができてよかった／訳を中国語を学習している人以外に読んでもらうという経験はなかなかないので良かった／学習を進めていく上で目標が明確だったのでよかったです／課題を自ら設定してアンケートという形で客観的な評価をもらい、更なる課題を見つけられるという点／相手のことを考えて翻訳の工夫をする努力ができた／中国理解を広げようというテーマは面白かった。

2) 大変だったこと

グループ作業（グループで進めること自体が大変）／作業時間の不足（学年が違うと授業外で予定を合わせるのが大変）／アンケート回収期間の不足／作品鑑賞時間の不足（他の班の翻訳作品を見ることは楽しかったが、しっかりと見る時間があまりなかったので、もっと時間が欲しかった）／資料集めや翻訳素材選び（中国語の書籍を入手することが難しい）／翻訳の難しさ・日本語の言葉選び（インターネットの利用がなければわからない単語が多く勉強になった）／翻訳の量が多かった。

3. 7 翻訳作品を読んでくださった方の感想～プロジェクト目標は達成されたのか

最後に、このプロジェクトの目標が達成されたのかを検証する。次頁の表5は、各グループが身近な人に翻訳作品を読んでもらい、読む前に持っていた中国への印象が変わったかどうかを尋ねたものである。アンケートは筆者が作成した統一フォームを用いた。中国への印象が「よくなったか」と問うとその答を誘導する可能性もあるので、「変わったか」どうかを問い、具体的にどう変わったかを記してもらった形にした。

表 5：アンケート結果：翻訳を読んで中国への印象は変わったか

	B 日本 旅行記	P 日本 留学日記	R 『知日』 アニメ等	Y 中国の 観光地	G 中国の 絵本	合計	%
かなり変わった	3	2	2	2	0	9	18.8
少し変わった	4	3	8	9	3	27	56.2
あまり変わらない	2	1	4	3	1	11	22.9
全然変わらない	0	0	1	0	0	1	2.1
合計	9	6	15	14	4	48	100

上記の通り、「かなり変わった」「少し変わった」を合わせると75%となり、この翻訳プロジェクトが対中認識に対して一定の役割を果たしたといえる。今回はアンケート回収に1週間しか時間をとれず、クラス全体で48名にしか聞くことができなかったので、次年度以降、もう少し時間をかけて調査したい。

最後に、ひとこと感想欄に寄せられた読者のコメントを以下に記す。コメント冒頭のローマ字は読んだ翻訳のグループ名、コメント後に年代・性別を付す。インタビューアとの関係や中国語学習歴も差し支えない範囲で書いていただいたので、わかるもののみ記した。(学習歴未記入コメントは「中国語学習歴なし」の人、「あり」(48名中6名)は期間を記した。

中国の印象が「かなり変わった」にチェックされた方のコメント

B：日本をよく思ってくれたことが嬉しい。(20代女性・小中高の友人)

B：逆に自分も中国へ行ってみたいと思った。(30代男性・アルバイトの先輩)

P：中国について少し悪い印象を持っていたけど、それはニュースとかの情報であって中国人は良い人ばかり。(20代女性・kuis 英米語学科4年)

P：もともとあまり悪い印象は持っていなかったけれど、中国人も日本人と変わらない。(20代女性・留学時の先輩)

R：日本人のことをキャラクターから分析して、キャラクターだけでなくコミュニケーションや文化に言及していたことから、日本人への理解関心を強く感じた。(20代女性・kuis 他学科・学習歴 10 ヶ月)

R：もともと中国に対して悪いイメージはあまりありませんが、日中両国、他の国に対してもそうですが、何でも吸収できる若い内に（もしくは子供のうちに）こんな文化もあるんだよと伝えていくことがひとつあるかなと思います。(20代女性・kuis 他学科)

Y：中国といえば食べ物のイメージが強かったので、景色の良さもあるのはビックリ。(20代女性・友人)

Y：前までは中国に行きたくないと思っていたけれども、読んでみて興味がわき、行ってみたいと思った。(20代女性・アルバイト仲間)

中国の印象が「少し変わった」にチェックされた方のコメント

B：反日の人ばかりだと思っていました。(20代女性・アルバイト仲間・学習歴 3 ヶ月)

B：民間の人はあまり反日精神が根強くないのだと思いました。(20代女性)

R：もともと中国に対して嫌いという感情はなかったが、中国人がこんなに日本文化を知ってくれている事を知って、良いイメージが変わった。(20代男性)

R：第一印象や一般的な概念に流されるのではなく、もっと細部まで相手のことを知った方がお互いに得をすると感じた。(20代男性・kuis 他学科)

R：アニメ文化をこれだけ調べてる人が中国にもいるんだなあって思いました。(20代男性・kuis 他学科)

R：中国の方もこのように日本で最近目立ってきている「ゆるキャラ」の存在にいち早く気づき、また日本国内にはさほどない、社会現象に与える影響を文面で表現するという方法は、隣国の日本に対する探究心の表れであると感じ

ます。(20代男性・kuis 中国語専攻4年)

R : 日本のイジメ問題に関して書かれていたことに驚いた。(20代男性・kuis 中国語専攻)

R : 自分の思っていた中国のイメージはあまり良くなかったけど、中国の人が日本に興味あると知って嬉しかったし、中国に対しての印象も良くなった。(20代女性・小中高の友人)

Y : 思っていたより世界遺産が多いと感じました。(20代男性・英米語学科3年)

Y : 中国にも綺麗な場所があるんだなと思いました。(20代男性・兄)

Y : 空気が汚いというイメージが強かったので、こんなに綺麗な所もあると知って驚いた。(40代女性・アルバイトの先輩)

Y : 行ってみたいとは思わないけど、悪いイメージが少し減った。(20代女性・アルバイト仲間)

Y : 全く初めて知ったので、とても興味を持った。(20代女性・アルバイト仲間)

Y : 長い歴史に触れられる良い場所だと感じました。(50代女性・母)

Y : 中国にもよいところは残されているのだと思った。(20代男性・高校の友人)

R : 今まで中国に行きたいと思ったことがありませんでしたが、行きたいと興味を持ちました。(20代女性・kuis 中国語専攻1年)

G : 中国人の神のとらえ方が面白く感じる。色々な中国の風習に少し興味がある。(50代女性・母)

G : 心がほっこりとしました。(50代女性・母)

G : 中国の絵本を読んだことがなかったので面白く読みました。(40代女性・叔母)

中国の印象が「あまり変わらない」にチェックされた方のコメント

B : 一人だけの意見で中国全体のイメージに影響はない。(40代女性・母)

P : 日本も他の国も日々変化していることに驚いた。(10代女性・妹)

R : 政治の上ではなかなか私たちの手でどうこうするのは難しいかもしれない

が、こんな風に中国へのイメージを払拭するような、手近にできることからやっていくことが非常に大事だと思う。(20代女性)

Y：中国にも良い観光地があるのは知っているが、やはりメディアの印象が強いので、中国に対して悪く思ってしまう。(50代男性・アルバイトの先輩)

Y：観光地の情報を聞いても関係ない。(50代女性)

Y：いい所だとは思うけれど、印象は変わらない。(60代男性)

G：道徳観は日本とあまり変わらない印象。表現の自由度は少し進んだ印象。(60代男性・父)

4. まとめと今後の課題

前掲の表5にまとめたアンケート結果と以上のコメントから、「翻訳を通して中国理解を広げる」というプロジェクト目標はおおむね達成されたといっていざらう。

しかし、中国人の日本旅行記を翻訳したBグループや中国の観光地の紹介を翻訳したYグループからは、最後のふりかえりディスカッション時に「何を翻訳すれば中国理解が広がるか、より深い思索と検討が必要だった」という声も聞かれた。次年度は、翻訳素材の選定前にブレインストーミングをおこない、十分なアイデア出しから始めたい。グループ分けの方法やプロジェクト全体にかかる時間なども再考する必要がある。「協働の学びをどう育むか」という点では、以下の4点に留意して指導していきたい。

- 1) ICTリテラシーを養う：GoogleDocsやDropboxなどを使って、プレゼン用のファイルや作品の編集を共同で行うこと。(Rグループはアンケート回収にも活用していた)
- 2) 危機管理能力を養う：プレゼン当日の遅刻・欠席があっても対処できるよう、グループ全員でファイルを共有しておくこと。問題が発生した時は、教員に相談する前に、まずグループのメンバーで協力して対応を考えること。

- 3) コラボレーション力を養う：分担したものをつなぎ合わせるだけでは統一感がないので、最初からテンプレートを作っておくなど、最後の完成イメージをもって制作を進めること。
- 4) 正確な翻訳力を養う：魅力的な作品を作っても、翻訳自体に間違いがあれば、原文に書かれた情報やメッセージを間違えて伝えることになり、これはあってはならないことである。グループメンバーで素材を分割し、分担翻訳で一つにつなげるのではなく、同じ文章をみなで翻訳し、検討し、より正確で自然な翻訳に仕上げること。

5. おわりに

学習者の大福帳コメントには、「4年間いろいろな授業を受けたが、このような進め方をする授業は初めてで、興味を持って授業を受けることができた。今後も続けてほしい」との声があった。

自ら獲得した知識やスキルを実際に活かして成果や効果をもたらすコンピテンシーの養成、目の前の現実の課題と向き合い、考え、行動できる人材の育成が急務であると叫ばれている。「アクティブ・ラーニングという形態をとることが目的になってはいけない」(教育課程研究会 2016/247 頁)との指摘や、ただのアクティブラーニングから「ディープ・アクティブラーニング」(学習者が他者と関わりながら、対象世界を深く学び、これまでの知識や経験と結びつけると同時にこれからの人生につなげていけるような学習) (松下 2015/23 頁) を目指すことが求められている。この翻訳プロジェクトが「主体的・対話的で深い学び」となり、人材育成の一端を担えるよう、今回課題となった点を改良しながら、今後も続けていきたい。

参考文献・参考サイト

新井和広・坂倉杏介 2013『グループ学習入門 学びあう場づくりの技法』（慶應義塾大学教養研究センター監修）

鈴木敏恵 2012『課題解決力と論理的思考力が身につく プロジェクト学習の基本と手法』（教育出版）

松下佳代 2015『ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために』（勁草書房）

教育課程研究会 2016『「アクティブ・ラーニング」を考える』（東洋館出版社）

内閣府・政府広報オンライン「外交に関する世論調査」（平成 28 年 1 月調査）

概要 <http://survey.gov-online.go.jp/h27/h27-gaiko/gairyaku.pdf>(2016 年 3 月 12 日発表)